

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-02-27 キーワード (Ja): 沖縄, 琉球, 災害史, 地震津波, 異常気象, 歴史文献情報 キーワード (En): 作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 豊見山, 和行, 真栄平, 房昭, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Jyunichi, Tomiyama, Kazuyuki, Maehira, Fusaaki, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987

第2部 資料編

凡例

(1)本資料編は既刊の諸史料集の中から自然災害に関する記事を抜き出したものであり、一貫性を欠いてはいるが、次のように分類されている。

I 正史関係

- 1 「球陽」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
- 2 「琉球国由来記」・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
- 3 「琉球国旧記」・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

II 首里王府仕置・久米島・両先島関係

- 1 首里王府仕置・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
- 2 八重山関係〔「石垣市史叢書」所収の史料〕・・・・・・・・ 105
- 3 「多良間往復文書控」・・・・・・・・・・・・ 161
- 4 系図家譜関係〔首里系、那覇・泊系〕・・・・・・・・ 169
- 5 系図家譜関係〔久米村系、宮古、多良間〕・・・・・・・・ 193

III 近代初期関係

- 1 「沖縄県日誌」・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
- 2 「上杉県令沖縄県巡回日誌」・・・・・・・・ 245
- 3 地域史所載新聞記事・・・・・・・・・・・・ 257

(2) II-1 首里王府仕置（沖縄県史料シリーズ）は、「宮古島在番記」「御使者在番記」「八重山島年来記」「久米具志川間切規模帳」「翁長親方八重山島規模帳」「富川親方宮古島規模帳」「富川親方八重山島規模帳」「与世山親方八重山島農務帳」「富川親方八重山島農務帳」「万書付集」「翁長親方八重山島船手座公事帳」「富川親方八重山島勘定座公事帳」「富川親方八重山島諸村公事帳」「富川親方八重山島船手座公事帳」「富川親方八重山島蔵元公事帳」「八重山島科人公事帳」「多良間島公事帳」「宮古島科人公事帳」「宮古島小与座公事帳」「久米具志川間切公事帳」「久米仲里間切公事帳」「久米仲里間切諸村公事帳」「公事帳写」の23文書を対象とし、文書ごとに記事を抽出し整理した。

(3) II-2 八重山関係は石垣市史叢書シリーズ所収の、「慶来慶田城由来記」「富川親方八重山島諸締帳」「与世山親方八重山島規模帳」「富川親方八重山島諸村公事帳」「翁長親方八重山島蔵元公事帳」「富川親方八重山島蔵元公事帳」「山陽姓大宗家譜」「上官姓大宗家譜」「長栄姓小宗家譜」「錦芳姓小宗家譜」「翁長親方八重山島規模帳」「参遣状抜書・上巻」「参遣状抜書・下巻」「日記抜（蔵元日記）」「大波之時各村之成行書」「大波寄揚候次第」「八重山島年来記」「富川親方八重山島規模帳」「目差役被仰付候以来日記」の18文書を対象とし、文書ごとに記事を抽出し整理した。なお、首里王府仕置と重複する文書が含まれているが、記事検索者が異なる点を考慮し、あえて調整せずそのままとした。

(4) 各記事の検索・抽出・整理を分担したのは以下の方々である。「球陽」・高崎典子、「琉球国由来記」「琉球国旧記」・大八木智子、「首里王府仕置」・上里隆史、八重山関係・

与那嶺哲、「多良間往復文書控」・高良倉吉、系図家譜関係（首里系、・那覇・泊系）・勝連晶子、系図家譜関係（久米村系、宮古、多良間）・山田浩世、「沖縄県日誌」「上杉県令巡回日誌」・安崎文人、地域史所載新聞記事・石附馨。

（5）本編の必要最小限の編集・整理作業は勝連晶子・高橋ユキ・仲間恵子諸氏が担当し、全体を高良倉吉が総括した。

I 正史関係

1 「球陽」

凡例

1. 使用したテキストは、球陽研究会編『球陽』読み下し編（角川書店、1974）である。
2. データベースの項目は以下の通りである。

No. 王暦(西暦)／出来事／場所／月日／備考／ページ／号

詳細：

1. 尚質 17 年(1664)／地震／鳥島／－／火山の噴火。死亡者 1 人。／194／352

詳細：鳥島に突然地震が起き、山が鳴動した。16 時（申刻）頃になると、大風がにわかにか起こって風が走り、海から火が噴出し波にのって浜まで至った。「数時」を経過しないうちに、それは砂を飛ばし石を転がし村を襲った。なお漁船に関しては、土中 132cm ほど（4・5 尺）に埋没してしまった。この時女性が 1 人、石に当たって死亡した。これを見た村の男女はこれを恐れて洞窟に逃げ、助かった。

2. 尚質 18 年(1665)／地震／－／春三月／－／194／355

詳細：－

3. 尚質 20 年(1667)／地震／宮古島／－／大地震。史実か？／202／409

詳細：－

4. 尚貞 19 年(1687)／異常潮位／与那城郡／－／海水張退が 4 度起こる。／222／542

詳細：三度までは突然潮が満ちたと思ったら、突然引き潮になった。四度目には徐々に潮が満ちてきて、普段と同じようであった。

5. 尚貞 25 年(1693)／暴風／佐敷間切／－／－／229／584

詳細：－

6. 尚貞 26 年(1694)／彗星／－／10 月 4 日／－／231／595

詳細：－

7. 尚貞 28 年(1696)／地震／宮古島／5 月 2 日／大地震。石垣崩壊。／232／606

詳細：人民を集めて壊れた石垣を修復する。

8. 尚貞 41 年(1709)／異光／－／6 月 9 日／禁城で異光が見える。／241／653

詳細：－

9. 尚貞 41 年(1709)／飢饉／－／－／連年凶荒す。台風・旱魃が原因。餓死者 3199 名。
／241／654

詳細：連年暴風に見舞われ、旱魃が酷かった。田畑は焦げたようになり、粟や稲は枯渇した。これによって新しく穀物を植えることもできず、また貯蓄してあった穀物もなくなった。人々は食べるものがなくなり、山菜を採ったり木の皮をはいだりして日々を食いつないでいた。冬の終わりになると山菜や海藻も尽き、餓死する者が 3199 名になった。翌年の春になると強盗や空き巣になる者もでてきた。

10. 尚益 1 年(1710)／貯蓄／－／－／初めて御用意蔵を設置。不時の需要に備える。／241
／657

詳細：－

11. 尚敬 20 年(1732)／暴風／豊見城間切／－／竜が引き起こした風である。竜風。家の壁や戸が飛ぶ。／301／952

詳細：－

12. 尚敬 28 年(1740)／大雨・雹／平良・鳥小堀、等／－／大雨・雹のため洪水が起こる。
／325／1079

詳細：川のそばにある住宅は洪水の被害にあい、住民 13 名死亡。

13. 尚敬 29 年(1741)／大雨・雹／－／冬 12 月／－／331／1103

詳細：－

14. 尚敬 30 年 (1742)／彗星／－／－／連年彗星出現。1742 年 2 月上旬。1743 年 11 月中
旬。1744 年正月末旬。／329／1100

詳細：1742 年 2 月上旬、3 夜の間彗星が見える。午前 4 時頃（五更）、彗星が北北東（丑）
に見える。俗に箒除星と呼ぶ。

1743 年 11 月中旬、19 時頃（初更）に彗星が西（酉）の方向に見える。彗星の尾は東の
方に伸びていた。

1744 年 1 月末旬の午前 4 時頃（五更）、彗星が東（卯）の方向に見え、尾は北西（酉戌）
の方向に伸びていた。夜が明ける頃には彗星は見えなくなっていた。

15. 尚敬 32 年(1744)／彗星？／－／－／月に入って、2 時間（一時刻）を過ぎないうちに
また出て北へ去った。／341／1144

詳細：3 月 12 日夜 21 時頃（二更）一つの星が南東（卯辰）の方向から現れ、すぐに月に
入り、「一時刻」を過ぎないうちにまた北西（戌亥）の方向から出て、北に向かって去って
いった。

16. 尚敬 32 年(1744)／両日／－／－／－／341／1145

詳細：9 月 15 日、太陽が 2 つ出現する。一つは東（卯）から出て通常通りに動き、一つは

東（寅卯）の方向から出て10時に東北（辰）の方向へ至り、消滅した。

17. 尚穆7年(1758)／暴風／－／－／暴風急雨。家1件と一本の樹が、吹き飛ばされる。
／335／1194

詳細：－

18. 尚穆8年(1759)／異星／－／3月9日／南東(辰)の方角に怪星が見える。／355／1195

詳細：－

19. 尚穆8年(1759)／異星／－／4月5日／南(巳午)の方角に異星が見える。／355／
1196

詳細：－

20. 尚穆9年(1760)／地震／－／3月29日・4月15日／午前2時頃、城郭内外57箇所、
地震で倒れる。4月15日、又地震が数度ある。／356／1201

詳細：－

21. 尚穆10年(1761)／大雨／伊江島・宮古島／－／雷に打たれ、死亡者1人（多良間島
にて）。／356／1203

詳細：－

22. 尚穆14年(1765)／大雨／石垣島／12月23日／火事により火災発生。／360／1226

詳細：－

23. 尚穆15年(1766)／飢饉／－／－／－／402／1383

詳細：－

24. 尚穆16年(1767)／飢饉／－／－／－／402／1383

詳細：－

25. 尚穆17年(1768)／地震／－／6月9日／午過ぎ。地震後に津波が起きる。／367／1248

詳細：6月9日、昼過ぎに大地震が起こる。王城の石垣数十箇所、三カ寺、玉陵、極楽陵の石垣が所々、地震で壊れる。その他様々なところに被害が出る。また地震が止んでも、潮の満ち引きが通常と異なり、66cm（二三尺）、あるいは99cm（三四尺）あまり、港に波が進入し、再三満ち引きを繰り返していたが、14時（未刻）頃になると静かになった。慶良間諸島座間味島では、海辺の畑が所々と、住宅が9戸波をかぶって損害を受けた。

26. 尚穆20年(1771)／霞／久米島／2月23日／山野に霞あり。／376／1284

詳細：－

27. 尚穆 20 年(1771)／地震／国中／3 月 10 日／大地震及び大津波発生。宮古・八重山が甚大な被害を受ける。／376／1286

詳細：3 月 10 日、大地震が起こる。本島から久米島、慶良間諸島に至るまで地震が起き、津波が起こる。宮古諸島、及び八重山諸島においてもまた地震が起き、津波が起こり、多くの土地や人が被害を受けた。

28. 尚穆 20 年(1771)／異常発生／石垣島／4 月 8・9 日以後／赤蠅異常発生。牛 47 頭、馬 27 頭が赤蠅にたかられ死亡。／380／1287

詳細：4 月 8・9 日以降、石垣島で赤蠅が大量発生し、牛馬にたかる。防ぐこともできず、だんだん痩せていき死亡する。死亡した牛馬の内訳は、農耕用の牛が 32 頭、牧牛が 15 頭、乗馬用の馬が 9 頭、牧馬が 18 頭である。4 月 20 日以降大雨が続いた後、すべて蠅はいなくなった。

29. 尚穆 20 年 (1771)／地震／石垣島／7 月 19 日～8 月 5・6 日／東海から雷鳴のような音がし、鳴るごとに地震が起こる。8・9 回。／380／1288

詳細：地が割れて水が湧いた場所が二箇所あった。

30. 尚穆 33 年(1784)／飢饉／—／—／—／414／1404

詳細：—

31. 尚穆 34 年(1785)／飢饉／国中／—／大飢饉。／403／1384

詳細：王府から穀物を支給するが、それでも粟米が足りず、国中の穀物や金を持っているものから借用してまかなう。又、宮古・八重山から穀物を送るよう指示する。

32. 尚穆 36 年(1787)／疫病・飢饉／渡名喜島／—／近年穀物が実らず、更に痢病が流行する。／405／1385

詳細：島中の困窮者は 149 人であり、療養や日々の食も欠いている。

33. 尚穆 40 年(1791)／異常潮位／本島／4 月 11 日／泊・那覇・本部・大里など。／412／1399

詳細：—

34. 尚穆 41 年(1792)／暴風／久米島／4 月 6 日／22 時頃から急に風が強くなり、家 10 戸などを吹き飛ばす。／416／1409

詳細：—

35. 尚穆 41 年 (1792)／大風／—／7 月 22 日／竜福寺が破壊される。／419／1413

詳細：—

36. 尚穆 41 年(1792)／疫病／渡嘉敷島／—／疱瘡。／424／1428

詳細：－

37. 尚穆 41 年(1792)／大風／石垣島／－／大風によって作物が損害を受け、飢饉となる。また疫病流行す。／424／1430

詳細：八重山島伊原間村（現石垣市）では去年何度も大風にあい、すべての農作物がことごとく損害にあい、日々の食もまかなうことができなかつた。その後も疫病が流行した。

38. 尚穆 41 年(1792)大風／－／－／農作物に被害を受け、日々の食に困る。／432／1450
詳細：－

39. 尚穆 43 年(1794)／雹／本島・久米島／－／本島南部・久米島など。大雨・雹。大きさは大小さまざまであった。／429／1441

詳細：久志、羽地、名護、今帰仁、国頭、大宜味、本部、久米島、渡名喜島、伊江島。

40. 尚温 1 年(1795)／日食／－／1 月 1 日／－／430／1443

詳細：－

41. 尚灝 1 年 (1804)／疫病／－／－／子年。疱瘡。／461／1531

詳細：－

42. 尚灝 2 年(1805)／大風／－／3 月 5 日／泡瀬で 19 戸、奥武で 6 戸、具志川村で 9 戸の家が吹き飛ばされる。／458／1522

詳細：午前 9 時から昼 12 時まで大雨が降り、水があふれる。その時とところどころで雹が降る。15cm（五六寸）から 6cm（二三寸）ほど、田んぼの溝や畦を破壊するが、作物に被害はなし。木なども吹き折れる。

43. 尚灝 2 年(1805)／雹／久米島／3 月 5 日／作物に被害なし。／459／1523

詳細：雹が降っていたのは 2 時間（一刻）ほどであった。

44. 尚灝 2 年(1805)／異常発生／久米島／10 月／鶴一羽飛来。高さは 66cm（二尺）ほど。／460／1528

詳細：－

45. 尚灝 2 年 (1805)／雹／真壁など／12 月 27 日／真壁で、作物の 7 割が損害を受ける。／461／1529

詳細：午後 14 時頃、真壁・具志頭・高嶺・喜屋武で、風雨が入り乱れて大小の雹が降った。最もひどかったのは真壁であり、大きさは 21cm（七八寸）以下で 6mm（二三分）あまりであった。作物の 7 割は被害を受けた。

他の場所に落ちた雹は、15cm（五六寸）以下で 9mm（三四分）あまりであった。しかし作物は被害を受けなかつた。

46. 尚瀨 15年(1815)／雪雹／伊平屋島／12月9日～12日／暴風の後、雪雹。種芋が被害を受ける。／474／1580

詳細：9日の16時(申刻)から12日の早朝(早晨)まで、伊平屋島で暴風が起こり、雹が降る。1.5cm(五分)～6cm(二寸)程積もった。このことが原因で、種芋がすべて腐った。

47. 尚瀨 15年(1815)／雪雹／久米島／12月10日～12日／暴風の後雪雹。作物に被害を受ける。／474／1581

詳細：暴風が吹き、気温が下がり、波が高くなり、雹が降る。その大きさはほとんど田豆粒か米粒の大きさと同じであり、2.1cm(七八分)あまり積もった。島の芋が枯れただけでなく、稲の苗やその他の作物もところどころ枯れた。

48. 尚瀨 21年(1824)／旱魃／－／6月／6月以来。雨乞いをする。／489／1633

詳細：8月25日～27日まで、大規模な雨乞いを行う。

49. 尚瀨 21年(1824)／飢饉／国中／－／申の秋～酉まで。／494／1661

詳細：－

50. 尚瀨 21年(1824)／飢饉／－／－／1824年～1827年まで。／497／1679

詳細－

51. 尚瀨 22年(1825)／飢饉／－／－／22年、乙酉。餓死者3358名。／489／1634

詳細：－

52. 尚瀨 22年(1825)／暴風／－／－／死亡者66名。／489／1635

詳細：－

53. 尚瀨 22年(1825)／彗星／－／10月21日／東南(卯辰)の方向。／490／1639

詳細：－

54. 尚瀨 22年(1825)／旱魃／竹富島／－／霧雨・旱魃。／491／1643

詳細：－

55. 尚瀨 23年(1826)／暴風／－／7月19日。9月8・9日／暴風以前から霧雨で農作物に被害。7月19日。9月8・9日に至るまで、暴風が頻繁に起こる。／491／1641

詳細：－

56. 尚瀨 23年(1826)／大雨／国頭／9月14日／－／491／1642

詳細：－

57. 尚瀨 23 年(1826)／疫病／渡名喜島／2 月／去年 2 月。疱瘡。／493／1652

詳細：－

58. 尚瀨 24 年(1827)／飢饉／国中／－／去年秋より本年春に至るまで。／493／1657

詳細：－

59. 尚瀨 25 年(1828)／旱魃／八重山島／－／永く旱魃にあう。／500／1694

詳細：－

60. 尚瀨 27 年(1830)／異光／－／6 月 20 日／20 時(戌)頃。南西(申酉)より東(卯辰)を過ぎる。その後音がする。／498／1687

詳細：－

61. 尚瀨 27 年(1830)／彗星／－／11 月 20 日／東南(卯辰)の方向。／498／1688

詳細：－

62. 尚瀨 28 年(1831)／日食／－／7 月 30 日 18 時(酉刻)から日暮れまで。日色青を帯びる。光輝なし。／500／1697

詳細：－

63. 尚瀨 29 年(1832)／旱魃／－／6 月／この年の 6 月以降。雨乞いをする。／502／1708

詳細：8 月 6 日～8 日まで、大規模な雨乞いが行われる。それでも雨が降らなかったため、9 月 3 日に再度雨乞いをする、この日の 14 時(未)頃雨が大きい降る。

64. 尚瀨 29 年(1832)／暴風／国中／9 月 10 日／大風・大水。死亡者 14 名。人家倒壊 3293 戸。／503／1710

詳細：倉が 23 戸倒壊。海船は大小ともに 990 隻が損壊。他、役所、寺院、田んぼ、川べり、道路、作物なども損害を受ける。又、玉城においては大波が起こり、人家 7 戸が浸水。久志においては、大波で死亡者 10 名、人家が 47 戸浸水。

65. 尚瀨 29 年(1832)／雹／金武郡／9 月 29 日／大きいのは茶碗、小さいのはそら豆サイズ。農作物に被害なし。／504／1712

詳細：午前 8 時(辰)頃。長さは 1.8cm(六七分)ほどであり、長短はまちまちであった。作物に被害はなし。

66. 尚瀨 29 年(1832)／飢饉／－／－／餓死者 2455 人。／504／1715

詳細：暴風の被害により、また旱魃のため、秋より翌年春に至るまで、飢饉となる。死亡者 2455 人。また疫病のため、死者 1473 人。

67. 尚瀬 32 年(1833)／飢饉／－／－／前年、旱魃のため飢饉となる。／506／1723

詳細：－

68. 尚育 1 年(1835)／旱魃／－／－／－／507／1726

詳細：－

69. 尚育 1 年(1835)／旱魃／－／－／今年 5 月以来。雨乞いをする。／509／1733

詳細：閏 6 月 24 日～26 日まで雨乞いを行う。

70. 尚育 1 年 (1835)／異星／－／8 月 27 日／19 時 (戌初刻) から 20 時 (戌正刻)まで、
寄星が西の方に見える。／509／1734

詳細：－

71. 尚育 1 年(1835)／飢饉／石垣島／－／－／510／1741

詳細：－

72. 尚育 1 年(1835)／疫病／石垣島／－／麻疹。／510／1741

詳細：－

73. 尚育 1 年(1835)／疫病／久米島／－／末年。麻疹。／555／1883

詳細：－

74. 尚育 2 年 (1836)／旱魃／－／－／5 月以来。雨乞いをする。／511／1743

詳細：7 月 22 日～24 日まで、雨乞いを行う。

75. 尚育 2(1836)／旱魃／－／8 月／この年の 8 月以来。9 月・10 月に雨乞いをする。／
520／1783

詳細：－

76. 尚育 5 年(1839)／疫病／－／－／疱瘡。／521／1793

詳細：－

77. 尚育 6 年(1840)／旱魃／－／1 月／これより以前雨降らず。雨乞いをする。／520／
1787

詳細：9 日～11 日まで雨乞いをする。

78. 尚育 6 年(1840)／旱魃／－／－／－／520／1789

詳細：旱魃のため雨乞いをする。2 月 15 日～17 日。

79. 尚育 6 年(1840)／疫病／久米島／－／疱瘡。／555／1883

詳細：－

80. 尚育 8 年(1842)／地震／宮古島／3 月 5 日～14 日／3 月 5 日～14 日まで数十度の地震あり。／525／1804

詳細：5 日 1 回。6 日 1 回。7 日昼 3 回・夜 2 回。8 日昼 4 回・夜 3 回。9 日昼 5 回・夜 4 回。10 日昼 9 回・夜 6 回。11 日昼 2 回・夜 3 回。12 日昼 6 回・夜 7 回。13 日昼 4 回・夜 2 回。14 日 1 回。多良間島においても 7 日～13 日に毎日 3 度地震があり。

81. 尚育 10 年(1844)／暴風／宮古島／7 月 6 日～7 日／死亡者 9 名。人家 2180 戸倒壊。家畜などにも死亡あり。／535／1840

詳細：宮古島、無比の暴風にあう。農作物に被害あり。また役所 23 戸あまり、倉 15 戸あまり、布織り小屋・染色小屋など 122 戸あまり、人家 2180 戸あまりが倒壊する。倒壊した家の下敷きになって、男女 5 名死亡。樹木も多く吹き倒される。海船数隻も損壊。溺死する者 4 名。牛馬なども死亡する。

82. 尚育 10 年 (1844)／雪／北谷郡／12 月 26 日／雪が少し降る。その粒は大変大きかった。／539／1844

詳細：－

83. 尚育 10 年(1844)／雹／恩納など／12 月 26 日／恩納・名護・久志・羽地・今帰仁。／539／1844

詳細：粒はそら豆・綿種・白大豆程の大きさで、大きさはそろっていなかった。

84. 尚育 13 年(1847)／暴風／宮古島／2 月 3 日／112 戸家屋倒壊。／552／1877

詳細：－

85. 尚育 13 年(1847)／異常発生／粟国島／－／鶴が 2 羽飛来。一羽は白、一羽は灰色。翌年春飛び去る。／558／1890

詳細：－

86. 尚泰 1 年(1848)／旱魃／－／6 月下旬より／8 月 9 日に雨乞いを行うと、8 時(辰)頃に雨が降った。／560／1900

詳細：－

87. 尚泰 3 年(1850)／日食／－／1 月 1 日／－／564／1910

詳細：－

88. 尚泰 3 年(1850)／旱魃／－／6 月以来／－／566／1917

詳細：10 月 3 日～5 日まで雨乞いを行う。翌年 (1851) の 7 月にも雨乞いを行う。

89. 尚泰4年(1851)／異常発生／粟国島／－／白鶴一羽。／568／1928

詳細：－

90. 尚泰4年(1851)／疫病／国中／10月より／大疫。10月より熱病流行。死亡者8224名。／569／1934

詳細：10月より泊村・北谷郡・西原郡で熱病が流行、12月に医師を派遣するが収まらず、だんだんと国中に広がる。翌年1月になり、疫病がますます流行。王府は米などを配給する。6月になると疫病の流行は収まった。この病気により死亡した者は8224名にのぼった。

91. 尚泰4年(1851)／飢饉／宮古島／1852年まで／飢饉・疫病。／580／1962

詳細：去年借りた米100石でも足りず、王府からまた米80石を拝借する。

92. 尚泰4年(1851)／疫病／宮古島／1852年まで／飢饉・疫病。／580／1962

詳細：去年借りた米100石でも足りず、王府からまた米80石を拝借する。

93. 尚泰5年(1852)／大風／宮古島／8月20日～翌日／大風・大雨。死亡者1人。家屋倒壊多数。／576／1948

詳細：8月20日の夜20時(戌)頃から翌日まで。人家が吹き倒されて、住む事ができなくなった人々が多くでた。また、堤防・浮道などが波で破壊された。また、波をかぶって人家が床下浸水した。

94. 尚泰5年(1852)／異星／－／7月19～25日／毎夜21時(戌亥の二時)頃、異星北西(西戌)方に見える。／576／1951

詳細：その形は仮辮(三つ編み)に似て、長さは99cm(3尺)あまり。

95. 尚泰5年(1852)／早魃／－／9月以来／雨乞いをする。／577／1953

詳細：10月9日～11日まで雨乞いを行う。

96. 尚泰5年(1852)／飢饉／八重山／－／－／580／1961

詳細：八重山島が飢饉・疫病となったため、王府より黒糖三樽・焼酎五十杯入り中壺三個・米八十石・硫黄が配給される。

97. 尚泰5年(1852)／疫病／八重山／－／－／580／1961

詳細：八重山島が飢饉・疫病となったため、王府より黒糖三樽・焼酎五十杯入り中壺三個・米八十石・硫黄が配給される。

98. 尚泰5年(1852)／飢饉／宮古島／－／与那覇村にて。／643／2162／

詳細：－

99. 尚泰 7 年(1854)／旱魃／－／5 月中旬以来／雨乞いをする。／581／1965

詳細：7 月 26 日～28 日まで雨乞いをする。

100. 尚泰 7 年(1854)／疫病／北谷郡／3 月中旬／－／581／1966

詳細：王府から医師が派遣される。防瘟の術を施す。

101. 尚泰 7 年(1854)／疫病／宮古島／6 月～10 月まで／死者 660 人余り。／581／1967

詳細：－

102. 尚泰 7 年(1854)／大風／多良間島／閏 7 月 2 日～4 日／11 月にもまた大風あり、死者がでる。作物にも被害がでる。／581／1967

詳細：－

103. 尚泰 7 年(1854)／異常潮位／多良間島／－／土地が陥没して潮が湧く。／581／1967

詳細：地が落ちて、潮が湧く。島民は驚いて丘に登り、避難した。しばらくしたらその潮は引いた。

104. 尚泰 7 年 (1854)／疫病／久米島／－／島中で熱病が流行。死者、具志川郡 50 人余り、仲里郡死者 89 人。／581／1968

詳細：－

105. 尚泰 7 年(1854)／旱魃／久米島／－／去年。芋が損傷。／581／1968

詳細：－

106. 尚泰 8 年 (1855)／大風／豊見城郡／－／人家・諸木を吹き倒す。／584／1975

詳細：－

107. 尚泰 8 年(1855)／旱魃／－／正月下旬以来／雨乞いをする。／584／1979

詳細：4 月 3 日～5 日まで、雨乞いをする。

108. 尚泰 8 年(1855)／飢饉／八重山島／－／－／632／2130

詳細：－

109. 尚泰 9 年(1856)／疫病／真壁郡／7 月下旬以来／鶏・鴨が 100 匹余り死亡。9 月に入ってから収まる。／590／2000

詳細：－

110. 尚泰 9 年(1856)／旱魃／－／10 月以来／雨乞いをする。／591／2002

詳細：12 月 20 日～22 日まで雨乞いをする。

111. 尚泰 10 年(1857)／雪／大里郡／－／大きさは落花生(唐豆)ほど。／591／2004

詳細：－

112. 尚泰 10 年(1857)／旱魃／－／去年 12 月以来／雨乞いをする。4 月になって、雨が降る。／591／2006

詳細：2 月 29 日～3 月 1 日まで、雨乞いをする。3 月 13 日、王が雨乞いをする。大規模な雨乞い。

113. 尚泰 10 年(1857)／飢饉／宮古島／－／1852 年以来飢饉になっている。／596／2019

詳細：－

114. 尚泰 11 年(1858)／大雨／勝連郡／－／大雨で岩石が崩落。／600／2036

詳細：－

115. 尚泰 11 年(1858)／地震／－／8 月～12 月／今年 8 月～12 月までしばしば地震が起こる。／601／2038

詳細：1 日で 7・8 回、あるいは 5・6 回地震が起きる。

116. 尚泰 11 年(1858)／異星／－／8 月 20 日～9 月 1 日／本年 8 月 20 日～9 月 1 日まで。

毎夜 18 時(酉)～20 時(戌)まで異星が見える。／601／2039

詳細：－

117. 尚泰 11 年(1858)／疫病／－／－／家畜の豚が疫病で多く死ぬ。／604／2052

詳細：－

118. 尚泰 12 年(1859)／旱魃／－／－／雨乞いをする。／613／2080

詳細：10 月 2 日より 4 日まで、雨乞いをする。

119. 尚泰 13 年(1860)／旱魃／－／－／雨乞いをする。／617／2090

詳細：7 月 25 日より 27 日まで、雨乞いをする。

120. 尚泰 14 年(1861)／異星／－／5 月 24～30 日／毎夜 21 時頃(戌亥の二時)、異星北西(亥方)に見える。／623／2106

詳細：27 日から全長が短くなる。

121. 尚泰 15 年(1862)／旱魃／－／－／雨乞いをする。／628／2123

詳細：7 月 19 日～21 日まで雨乞いを行う。その後雨が降るが、田が潤うまでに至らず。8 月 3 日～5 日まで再び雨乞いを行う。

122. 尚泰 15 年(1862)／異星／－／7 月 24 日～8 月 11 日／毎夜 20 時(酉)～22 時(亥)の後

まで、異星が北西(亥子)の方向に見える。／628／2124

詳細：－

123. 尚泰 15 年(1862)／異光／－／7 月 28 日／18 時(酉)頃。消えた後に音が聞こえた。

／628／2125

詳細：光が北西(酉戌)より、南東(辰巳)に通過する。

124. 尚泰 15 年(1862)／疫病／国中／－／麻疹が流行。／628／2126

詳細：首里・泊・那覇・唐栄・諸郡等。病気になった者に、1 人米 5 升を支給する。

125. 尚泰 16 年 (1863)／異常潮位／－／10 月 1 日～11 月／潮の満ち方が少なかった。／

636／2139

詳細：潮が満ちることが少なく、通常と比べて約 36cm(一尺二三寸)ほど潮位が低かった。退く時は通常通りであった。

126. 尚泰 16 年(1863)／旱魃／－／－／雨乞いをする。／638／2148

詳細：12 月 5 日～7 日まで雨乞いを行うものの効果がなく、22 日～24 日まで再び行う。

127. 尚泰 18 年(1865)／異常潮位／国頭郡／2 月 4 日／昼 16 時(申)～18 時(酉)まで。にわか
かに満ちてにわか
かに退くこと 4 回。／644／2166

詳細－

128. 尚泰 18 年(1865)／異常発生／伊江島／2 月／鶴 2 匹が飛来。色は灰色。／644／2167

詳細－

129. 尚泰 18 年(1865)／雹／高嶺など／3 月／にわか
かに雨雲が集まり、雹が降る。／644
／2168

詳細：高嶺・東風平・具志頭・玉城・南風原・大里などにおいて。雹の大きさはえんどう豆、そら豆、黄豆(大豆の一種)などの大きさをしており、大きさがそれぞれ異なっていた。また、玉城・南風原・大里などでは降っていないところもあった。作物に被害はなし。

130. 尚泰 18 年(1865)／雹／久米島／－／仲里郡、島尻村。村中ならびに付近の田や畑に
雹が降る。／644／2169

詳細：雹の大きさは、39cm(一尺二寸)の丸、あるいは指先と同じくらい。大小さまざまであった。作物に被害はなし。

131. 尚泰 18 年(1865)／異光／喜屋武郡／8 月 3 日／20 時(戌)頃。／644／2170

詳細：天の東方より光があり、西方約 30.6m(計十有七八間)に飛びすぎる。その形、横 6.6cm(二寸)・長さ 82.5cm(二尺五寸)ばかり。その色は火に青色を交ぜたような色であり、消えた後に音が聞こえた。

132. 尚泰 19 年(1866)／大雨／－／8 月／土砂崩れで人家や道路が破損する。／648／2191
詳細：夫役を動員して修理する。

133. 尚泰 20 年(1867)／大風／鳥島／8 月 1 日～3 日／8 月 1 日 18(酉)時～8 月 3 日 16(申)
時まで、大風大波が起きる。／649／2197
詳細：諸船が破損し、更に墓が 3 つ倒壊し骨が流出する。

134. 尚泰 21 年(1868)／疫病／－／－／天然痘のワクチンとして牛痘接種を行う。／651
／2208
詳細：－

135. 尚泰 23 年(1870)／暴風／－／－／去年。三度起こる。／655／2222
詳細：－

136. 尚泰 25 年(1872)／暴風／－／9 月 8 日／暴風大雨にて、山が崩落し、家が潰れる。
死者一家 5 名。／661／2253
詳細：－

137. 尚泰 25 年(1872)／異常発生／摩文仁郡／－／白鶴 1 羽飛来。／662／2254
詳細：－

138. 尚泰 26 年(1873)／異常発生／久米島／－／仲里郡。白鶴 3 羽飛来。／662／2259
詳細：－

139. 尚泰 26 年(1873)／異常発生／摩文仁郡／－／白鶴 1 羽飛来。／662／2260
詳細：－

140. 尚泰 26 年(1873)／異常発生／真壁郡／－／白鶴 1 羽飛来。／662／2261
詳細：－

141. 尚泰 26 年(1873)／異常発生／久米島／－／久米島、具志川郡において。白鶴 4 羽飛
来。／662／2262
詳細：－

142. 尚泰 26 年 (1873)／異常潮位／宮古島／－／井戸・泉が減少する。また潮の満ち退
きが通常と異なる。／662／2264
詳細：－

143. 尚泰 26 年(1873)／旱魃／－／－／雨乞いをする。／663／2266

詳細：2月、早魃のため2月3日～5日までと、25日～27日まで雨乞いをする。7月18日～20日まで、10月18日～20日まで、11月8日～10日まで、雨乞いをする。

144. 尚泰27年(1874)／大風／八重山島／6月／人家が倒壊、作物も被害を受け、飢饉となる。／666／2281

詳細：王府から錢48万貫文を支給する。

145. 尚泰27年(1874)／異常発生／真壁郡／－／白鶴1羽飛来。／667／2287

詳細：－

146. 尚泰28年(1875)／異常発生／久米島／－／具志川郡において。鶴2羽が飛来。高さ約132cm(4尺)、羽は灰色。／668／2300

詳細：－

2 「琉球国由来記」

凡例

1. 災害に関する記述について、下線を引いて、下に訳文を書いている。
2. 『琉球国由来記』の史料については、【外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』角川書店 1997年】を使用した。そのため頁数はその史料と対応している。
3. 年代順に並べ、年代が不明なものは後ろにまとめた。

『琉球国由来記 卷三』83頁「9 橋」(伝説か?)

当国、橋始者、(欠)先王尚金福御宇、景泰三年壬申、兩勅使陳・董、渡海来之時、自那覇首里往復之浮道、航渡之江也。於茲集国中之船、而架船橋、欲相迎也。因之(欠)国王、詔国公曰、有計謀道陸而迎(欠)兩勅使哉云云。国公、鞠躬奏曰。是非仏神之威力、豈有人力之所及哉。因祈誓天照大神曰。十七日之間、首里往復之渡江、来潮涸而見海底。則運土石、架石梁(自安里邑若狭町口道橋、曰長虹橋也)。以後所々、次第架橋也。中華、「堯時、橋梁ヲ作、往来ヲ通ズ(古今原始)。」倭国、「伊奘諾尊・伊奘冊尊、天浮橋ニ立給フト。是橋ノ始久シ。仁徳天皇十四年冬十一月、猪甘津(摂州百濟郡)ニ橋渡ス(日本紀)。是、橋ヲ設テ、人ヲ渡サレシ始ニヤ。」

天照大神に祈って誓いを立てたと云う。十七日の間、首里往復の江に、潮が来て水が涸れて、海底がみえる。(景泰三年、1452年)

『琉球国由来記 卷十一』221頁「50 頂峰院薬師如来」

天順年間、那覇之東南隅海中、夜々照曜十二之靈光。(台)先王尚泰久、於城中見之、為奇異、令卜占之。卜人奏朝曰。薬師如来之靈光也。薬師者在十二眷属。是故輝十二靈光也。此奇瑞也。或時漁人、此汀網引。石像薬師如来、得掛出。依漁人奏朝。有王叡感。構一字之堂、奉安置。造宮寺、号東光寺<撞鐘一口。天順三年己卯三月有銘。>有住僧<開山門徒也。此時、公寺。于何代賜密門、為私寺哉。依無記楮、不可考矣。>其以後靈光止。誠如来之威光也。貴賤老弱、奉崇敬、有靈驗也。(後略)

天順年間(1457~1464年)那覇の東南の海中に、夜な夜な十二の靈光が照り輝いていた。先王である尚泰久は、城の中でこの光を見て、奇異に思われたため占いをさせた。占った人物がいうには、薬師如来の靈光であった。

『琉球国由来記 卷十』196頁「66 浮亀山照太禅寺記」(伝説か?)

中山府庁坎方、而有海中涌出之一島嶼。名曰伊江也。素有一村一井。地小狭而無池塘流水也。故雖無田産、郊圃地腴、而菽・麦・黍・芋、恒足矣。加之、馬・牛・羊・鶏・犬・豕、聚如簇也。因之、一島之黎民、不飢不寒、厥樂陶々也。爰在一靈社。相伝社之権輿世者、大明嘉靖年中、夜夜有赫々大光明。其氣熾然不息、直騰碧空、若射牛斗也。居民老弱男女、異之相議。而不凡慮之克得所知。增生疑惑也。由是、適、島之長、涉茲地、以瑞聞也。因(欠)尚清王、遣使而決其怪異之事。其夜光明增晟也。仍待旦日、遣使徘徊於草莽之間。

忽拾得一古鏡。収之岩峒、帰来奏此事也。蓋其靈光也乎、(欠)尚清王、勅問門中之諸老宿也。諸老奏曰。恭惟、此事不是尋常之怪事也。即伊勢天照大神之垂迹也。夫神者不測之理、明者顯迹。名之神。故与天地齊其德、与日月同其光。是以神威重。則四時調、四海安也。速建靈社、結僧庵、以可崇敬焉。然始、僅結葍社及草菴、而号曰浮龜山照太寺也。(後略)

大明の嘉靖年中(1522～1566年)、夜な夜な赤々と光り輝く光があった。その気はさかんで然るに収まらない。すぐに碧空に上がり、牛斗(牽牛星と南斗星または牽牛星と北斗星)を射るようであった。伊江島に居住する老若男女は、これは異なこととして相談したが、ありきたりな考えしか出すことができず、ますます疑惑が生まれてきた。そのためただ島の長だけが琉球の本島に渡り、どのような意味を持つか聞いた。そのため尚清王は使者を遣わした。その夜の光明はますます明るく照り輝いていた。そしてそのまま朝が来るのを待ち、使者は島を歩き回った。そこですなわち一つの古い鏡を拾った。それは岩のところにあった。使者は帰って、尚清王にこのことを奏した。まさしくこれは靈光であると。尚靖王は門中の年老いて経験の豊富な老人たちに質問した。諸老たちが尚靖王に奏した内容として、諸老たちが考えたところ、これは普通の怪事ではなく、これすなわち伊勢の天照大神が仮の姿となって現れた証であるというものであった。

『琉球国由来記 卷三』87～88頁「15 冠」

(前略)尚寧王世代、万曆四十七年己未二月二十日、久高島行幸之時、於途中遇大雨。供奉人員、濡冠衣。然所簫氏中地親雲上名礼(時引筑登之)八卷、下地曲板組布。故無囁綻之色、異于諸人帕。幸(欠)聖主有叡覽、褒賞之云云。然則今之八卷之制、始乎脇名国、而中地潤色之矣。

(前略)尚寧王世代の万曆四十七年己未(1619年)二月二十日、久高島に行幸の時、途中において大雨にあった。

『琉球国由来記 卷十一』208頁「5 本尊」

于時嘉靖元年辛巳、日域比丘、日秀上人、当社再興、自刻弥陀・薬師・観音、三尊正体、奉崇神宮。靈光燿然。其後、崇禎六年癸酉六月、住持頼雄和尚時、俄然灰燼矣。奇哉、頼雄和尚、無思慮、前日請奉三尊、安置于寺。故其時遁火難。是不人力也。可鑑日秀靈作尊也。

崇禎六年癸酉(1633年)の六月、住持頼雄和尚の時、神宮はにわかにならなくなってしまった。しかし不思議なことに、頼雄和尚は特に考えず、前日奉っている三尊を請けて、寺に安置していた。故にちょうどそのとき起こった火難から逃れた。

『琉球国由来記 卷八(那覇由来記)』159頁

「2 三重城(西海に向かい崇める所有り)且大橋・中橋・沖道、修理の事」

此三重城ハ、ワウノ大比屋城ト云。往昔彼人遊観之地ニテ、異賊襲来、為防禦、如城築ケル。年代不詳。大橋・中ノ橋ハ、木ニテ渡セリ。然ルヲ、康熙三十三年甲戌七月十三、四

日、大風有テ、村中ニ夥シク潮揚リ、那覇ノ町、平地ニ白浪立。此時、沖道并兩橋、皆破損シケレバ、次亥年ヨリ修理始リ、至于子年、功終ヌ。是時為石橋。委ハ碑文ノ記ニ見ヘタリ。

康熙三十三年甲戌（1694年）七月十三、十四日、大風があつて、村中に激しく潮が揚がった。那覇の町は平地において白波が立った。このとき沖道ならびに両橋はすべて破損して、次の亥年より修理が始まり、子年になって修理が終わった。

～以後、時期不明～

『琉球国由来記 卷三』92頁「26 蕃薯」

当国、蕃薯者、万曆三十三年乙巳、総官野国（野国村人）從中華、鉢植帶來。麻氏儀間親雲上真常乞求、且問習薯之栽培。野国誥曰。以葛為輪圈、而投地栽培。歷月數舉葛、掘薯食也。真常、如此數年。時值大飢饉歲。真常以蕃薯、推充於國中、為五穀之補也。是為功奇哉。故麻氏、為報総官野国之恩、祭之也（諸見真常之譜）。黃蕃薯、康熙三十三年甲戌、自唐持來也。是凌霜雪、而民得利云（見翁氏譜）。

時は大飢饉の年に直面した。真常は蕃薯を国中に充てて、五穀の補いとした。

（萬曆以後、時期不明）

『琉球国由来記 卷十（琉球国諸寺旧記）』176頁「3 肇創兩廟記 附重修事」

弘治七甲寅之間、始構宗廟於方丈右、而謂之東御照堂也。以後、至于隆慶五辛未、併建而謂之西御照堂也。復至於万曆年間、重修而如故也。以來不遑修復。始葺雖以板、葺宇之腐朽、柱梁之傾圮、蓋岌々乎、不可復支也。故其中間、以苫覆之也。当疾風暴雨之時、交浸歲久也。視者不忍視之。以故順治九壬辰之間、修而蓋之、以陶瓦也。以其価廉而功省也。又逮於康熙十五丙辰、雖修之、歷于十有餘年癸酉、而雨則兩廟沛然、等不乾也。繇之修復之、次選画工之得於妙手者、重潤色（台）世祖尊像也。繼而蟠龍舞鶴、尽其巧美、而四交煌矣。仍莊嚴之華麗、蓋如視開基之昔也哉。

疾風暴雨の際に、水に浸かってから長く年が経ってしまった。

（萬曆年間〈1573年〉以後、順治九年〈1652年〉以前、時期不明）

『琉球国由来記 卷八（那覇由来記）』160頁「8 コバヅカサの事」〈那覇西村の中の新辻〉此神体ハ石ニテ御座ス。海中ヨリ上タルトイヘドモ、巨細未伝。社ハ康熙三十七戊寅、建立也。海中ヨリ上リタル年、不可考也。

海中より上がってきたと言っても、まだ詳しいことは伝わっていない。

（康熙三十七年以前、時期不明）

『琉球国由来記 卷八（那覇由来記）』159頁「3 中三重城の事」

前ニハ中城ト云ケルが、近比ヨリ中三重城ト云也。昔比所ニハ、龍王ヲ安置シ奉リケルニ、

堂宇破損シケリ。其頃早魃有シニ、龍王ハ雨ヲ司給フトナレバ、堂ヲ修理シ、雨ヲ祈ルベシト、訴公朝シケレバ、此所ハ人村ニ程遠クシテ、堂ノ守ナキユヘ、早く及破損。然レバ、久米村ニ移シ奉ルベシトテ、上ノ天妃ニ堂ヲ立、移シ奉ルトイヘリ。

そのころ早魃が有り龍王は雨をつかさどるので、堂宇を修理し、雨（が降ること）を祈るべきだ。

(時期不明)

『琉球国由来記 卷八（那覇由来記）』161頁「12 那覇の町魚小堀の事」
往昔東村ニ失火度々ニ及ブ。是、天妃灯明ノ火精ナリ。是ヲ避ントナラバ、此所ニ堀ヲホリ、水ヲタハヘヨト、知地理人云シトテ、万曆年間ニ堀ケルト、日伝ヘケリ。或ハ道ノ街、火ノ字ニ似タリ。故ニホリケルトモイヘリ。

昔のことであるが、(那覇の) 東村において失火がたびたび起こっている。これは天妃堂の灯明の火精のせいであった。

(時期不明)

『琉球国由来記 卷八』162頁「17 薬師堂旧跡（那覇の中の東村）」(伝説か?)
当初、那覇ノ東南ニ当ツテ、海中ニ夜夜光物アリ。人皆奇異ノ思ヒヲナス。或時、漁人、此所ニテ網ヲ引ケルガ、石像ノ薬師如来、網ニ掛テゾ出給ヒケル。此唯事ニアラズ。此程光物シケルハ、如来ノ威光ニテ御座ストテ、則此靈験ノ所ニ土ヲ築、一字ノ堂ヲ立、薬師如来ヲ崇奉リケル。寺ヲ作、東光寺ト号、住僧アリ。此寺ト那覇トノ間、海中ニテ、橋ヲ掛テ有シニ、唐船堀ヲホリシ時、彼処ヨリ堀出ケル土ニテ此海中ヲ埋テ、大地トヒトツニ成ケルトナリ。爾ルニ康熙十一子年、此東光寺、覚遍座主隠居所ニテ、此寺地ヲ令沽却故、俗家ト成ル。覚遍隠居寺之替地ハ、若狭町松尾ノ麓ニ堂宇建立、寺ハ未造営。而覚遍死去之後、堂宇破壊ス。因如来ハ、頂峰院ニ移シ奉ルトナリ。

当初は那覇の東南にあたる海中に、夜な夜な光る物があった。人々は皆奇異に思っていた。ある時漁師がこの場所において網を引いたところ、石像の薬師如来が網に引っ掛かりお出ましになった。

(時期不明)

『琉球国由来記 卷八（那覇由来記）』163頁「24 平松ノ下トイフ事」
昔、石門ヨリ広厳寺ノ返迄ニ、百五十六本ノ並松有。此平松モ百五十六本ノ内ナリ。殊ニ勝テ名木タリ。近頃枯タリ。然レドモ其辺ヲ今ニ平松ノ下トイフ也。

昔石門より広厳寺の辺りまで、百五十六本の並び立っている松の木があった。この平松(丈低く平らに広がった松)もその百五十六本の内である。まことに優れた名木であるが、近頃枯れてしまった。

(時期不明)

『琉球国由来記 卷十 (琉球国諸寺旧記)』189頁「45 天徳山龍福寺記」

原以、守礼之北、過金剛嶺、歩半里程、有一練若。号天徳山龍福寺也。伝聞、昔(欠)英祖王踐祚時、咸淳年間、從異域、有梵侶航海来。俗不称其名、唯言補陀洛僧也。王始見之重之、營精舍於浦添西、号極楽寺(旧趾尚存)、延以居於焉。是我朝、梵侶・仏宇之始也。其居、岩石峨峨、峻坂嶮路、甚苦往来也。既歷年久、而殆逮荒廢乎。今寺前谷上有一藪。再移營於焉也。蓋又称旧号也乎。厥后遇離火災。故住僧之階級・寺宇之記録、皆燒却了(後略)

その後、火災に遭ったので、住僧の階級や寺宇の記録はすべて焼けてしまった。

(時期不明)

『琉球国由来記 卷十三』278頁「60 友盛の嶽御イベ 同村」(伝説か?)

往古、聞得大君、久高島御祭礼ノタメ御渡海之時、於中洋逢逆風、日本之地ニ漂着スク為何地乎、不伝。於彼地年月ヲ送玉フ。然レバ当国、七ヶ月早魃アリケル故、巫々申談ニ、聞得大君右御仕合故早仕ルナラント云。然ドモ、風聞ニモ何国ニ御滞在之儀不知ニ、アリケレバ、バテン巫舩頭、大城ノロ舩筑、水主マデ女性バカリ乗合、致開洋訪尋行ケルニ、於日本之地、如願、聞得大君奉相見也。バテン巫、意趣ニ、御迎ニ渡海仕タルト、奏ケレバ、如本国有御出舩バテン瀉原ニ御着舩有タルトナリ。斎場御嶽之下、マチカキ泊ニ御着舩ト、云説モアリ。(後略)

遠い昔聞得大君が久高島の祭礼のため渡海した時、海中において逆風にあい、日本の地に漂着した(どこの地かは伝わらず)。この地において年月を送っていたところ、琉球では七ヶ月早魃が起こっていた。そのため巫々たちが相談したところ、聞得大君が日本に漂着してしまい、琉球にいないので、早魃が起こってしまったと言う。(後略)

(時期不明)

3 「琉球国旧記」

凡例

1. 災害に関する記述について、下線を引いて、下に訳文を書いている。
2. 『琉球国旧記』については、【伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編纂『琉球史料叢書 第三』井上書房】を使用した。そのため頁数はその史料と対応している。
3. 年代順に並べ、年代が分からないものは後ろにまとめた。

『琉球国旧記 卷之五』100頁「八 安里橋」(在泊邑)

景泰三年壬申。尚金福世代。冊封天使。來臨本國。時 王。命國公懷機。架之。公奉命。求祈天照大神。不數日。海水乾涸。始築長堤。並安里・牧志・待兼橋。以通往還。康熙庚戌之秋。洪水橫流。而橋梁敗壞。至十六年丁巳。亦加修葺。民未病涉也。詳于長壽寺紀。

景泰三年（1452）の尚金福の時、冊封天使が琉球へ来た。時に王は国公である懷機に、橋を架けるように命じた。公はそれを受けて天照大神に祈ると、数日間で海水の水が枯れてしまい、その時長い堤、また安里や牧志、待兼橋を築き、往来の道を通した。それは康熙庚戌（1670年）の秋、洪水で流れてしまった。

『琉球国旧記 卷之七』138頁「二九 頂峰院薬師如来」

天順年間。那覇津之東南。夜々有十二異光冲天。采色照波。尚泰久王。見之大怪。令卜人占之。曰。奇矣哉瑞矣哉。薬師有十二眷属。而令發出十二靈光也。一日有漁夫。撒網捕魚。不料網中獲一石。仔細視之。乃薬師尊像也。其後靈光遂止。而不復放光之津中。築立關宅。創建一寺。而奉安焉。(後略)

天順年間（1457～1464年）那覇津の東南に、夜な夜な十二の靈光が照り輝いていた。

『琉球国旧記 卷之五』128頁「浮龜山照大寺(在伊江)」

嘉靖年間。伊江山。每夜放大光。射斗牛間。居民見之。大驚且怪。遂將此事。奏之于 王。由是尚清王。差使往伊江山。視之。使臣往到伊江山。其夜放光愈熾。自暮達旦。不敢滅焉。翌旦使臣。徘徊于草野之間。以爲尋拾焉。果有拾得一古鏡。遂收以袖之。竟置于洞中。還朝復命。于此尚清王。乃召老僧輩問之。諸僧皆答曰。乃是天照大神之所垂迹者也。速建靈社。奉安之于其中。可以崇信焉。故 王命輔臣。構葑社并草菴。令僧一人而監焉。名其寺。曰照太。山號浮龜。萬曆三十九年辛亥。尚寧王。從薩州回駕。到本國。此時王。多建修神社仏閣。而功力不能及之。萬曆四十八年庚申。忽然龍體。染病而薨。乃至崇順十一年戊寅。尚豐王。繼尚寧王之志。令重修寺并社。而令月江西堂而守焉。(月江僧。位在西堂)

嘉靖年間（1522～1566年）、伊江山に夜な夜な大きく光り輝く光があった。

『琉球国旧記 卷之一』26頁「魚塘」(俗曰魚小堀)

萬曆年間。那覇東邑。屢次火燒。人家盡屬燒燬。人皆以天后廟。燈火之精。爲此災殃。于是天妃廟前。鑿倣此塘。以防火災。又一說。其忌里街似火字。以掘此塘而避焉。

万曆年間(1573~1619)、那覇の東村でしばしば火災が起き、人家がことごとく焼けてしまった。人は皆この原因は、天后廟の燈火の精だと思った。

『琉球国旧記 卷之四』77頁「八 帕」

(前略)且。遺老傳云。昔時以乙丈三尺之布。纏頭八重卷。以爲冠。故曰八卷。神道記云。本以一丈三尺布纏頭。然分薙國。改造八卷。

分薙國。乃黃氏脇名國親雲上吉治也。

萬曆四十七年己未。二月二十日。尚寧王。幸久高島。行到中途。忽遇大雨。群臣衣冠盡濕。獨有引筑登之。蕭名禮(中地親雲上)所戴之冠。不濕者。王怪之視之。則曲板爲地。組布爲皮。王深褒美焉。以此考之。八卷始于脇名國。而成蕭名禮乎。(後略)

万曆四十七年(1619)二月二十日、尚寧王が久高島への行幸の途中、突如大雨に遇った。

『琉球国旧記 卷之一』23頁「五二 新村渠植戍土樹」(俗呼枯把手樹)

新村渠地。舊屬花城邑。茫茫海濱。無有樹木。順治年間。牛氏花城親雲上秀咸。已任地頭職時。植枯把手樹數根。以防風難。以壯偉觀。

順治年間(1644~1661)牛氏花城親雲上秀咸が地頭職に任ぜられた時、枯把手樹をいくつか植えた。これは風難を防ぐためである。

『琉球国旧記 卷之五』101頁「一二 金城橋」

自古而來。創造木杠。然或爲虫蛙所害。或爲風雨所傷。洊至頽敗。康熙庚戌之季秋。洪水橫流。氾濫村郭。而敗壞已極。康熙丁巳夷則。尚貞王世代。築石建橋。以通往還也。

昔から木で作られていたが、或いは虫蛙の害、或いは風雨によって傷つき、すっかり衰えてしまった。また康熙庚戌(1670年)の秋、洪水で流れてしまった。また村は洪水ですっかり壊れてしまった。

『琉球国旧記 卷之五』101頁「一五 勢理客橋」

夫水無橋梁。則不能往還矣。是以先王。創建石橋。使民得往還之便。而歷年久遠。及于頽敗。至康熙十八年己未。尚貞王世代。仍其舊慣。重修石橋。康熙三十年辛未正月。爲洪水所壞。至于傾圮。亦加修葺。以爲堅固也。

康熙三十年(1691年)の正月、洪水で壊れた。

『琉球国旧記 卷之一』19~20頁「三六 三重城」(在那覇津右邊。與屋良佐並峙)

往昔那霸邑。有王農大親者。常遊此。以觀光景。亦恐爲賊兵見掠劫。高築雉堞。以備防禦。其橋三座。一曰大橋。一曰中橋。一曰沖橋。內有大中二橋。原爲板杠。康熙三十三年甲戌。七月十三日。偶有大風。而潮水湧漫。時爲海潮所破。翌年。始加修葺。至于丙子。告成。時亦改築石橋也。

康熙三十三年甲戌（1694年）の七月十三日に、たまたま大風が吹き、海水が湧き立ち一面に広がった。時間がたつと、海水の流れで破壊されてしまった。

『琉球国旧記 卷之五』101頁「一六 臨海橋」

曩者（さきごろ）。砌石爲隄。設木爲橋。至康熙三十三年甲戌秋。尚貞王世代。颶風陡作。其橋乃陷於巨浸。而隄亦潰矣。爰發帑金。修葺舊隄。亦架石爲橋。々上左右。悉豎石爲欄。以垂永久矣。

康熙三十三年（1694年）の秋、尚貞王の世代の時、台風が突然襲い橋は沈んでしまった。

『琉球国旧記 卷之五』101頁「一七 石火石橋」

原設建木杠。以渡人民。而不能堅固。屢加修葺。至康熙三十三年甲戌秋。尚貞王世代。洪水橫流。已至傾圮。於是新築石橋。以得人民之安也。

康熙三十三年（1694年）の秋、尚貞王の時、洪水で流れてしまった。

～以下、時期不明～

『琉球国旧記 卷之五』101頁「一三 板敷橋」

往昔之世。未知磊石爲基。但架木爲梁耳。每逢洪水。屢致頽敗。毛氏座喜味親方盛員外祖。有國吉仁也者。築石爲基。以致堅固。王深褒嘉之。特賜佐久眞地。以爲請地。經歷久遠。不能往来。至于康熙二十八年己巳。尚貞王時。命輔臣。創建石橋。以爲堅牢。

洪水に遭うたびにしばしば頽敗するので、毛氏座喜味親方盛員の外祖に国吉にやという者がおり、彼が石を基として、堅固に作った。

（康熙二十八（1689）年以前、時期不明）

『琉球国旧記 卷之一』20頁「三八 博奕屋」（在那霸西村州崎）

那霸之北。有一潤窟。深遮風雨。似乎人屋。遠隔村家。無有人知。由是。往昔之世。有博徒者。多聚于此地。竊爲博賭。以爲戲玩。因名此窟。曰博奕屋。王近世岩崩。而洞窟已淺。今亦爲人墓。

近世になると岩が崩れ、そのため洞窟は浅くなった。（時期不明）

『琉球国旧記 卷之一』21頁～22頁「四五 薬師堂」（在那霸東邑）

往昔之時。那霸津。夜々異光冲天。彩色照波。人皆奇異之。一日漁夫。撒網捕魚。網中偶

獲一石。仔細視之。乃藥師尊身也。

遂于其海中。築土闢宅。創建此堂。奉安其藥師。但築堤架橋。以通往来。後又鑿作唐船堀之時。將其土塊。覆填其海。以爲寺地。名之曰東光寺。

至于康熙十一年壬子。住持覺遍。却將此堂。賣與俗人。復卜地若狹町。松林之麓。設建宇。未告成時。覺遍偶染病而卒焉。後亦奉其藥師。移安于頂峯院。詳于頂峯院紀。

昔、那覇津に夜奇妙な光がまっすぐに高くあがっていた。その光は波を照らしていた。人々は皆これは奇異なことと思っていた。ある日漁夫が魚を捕らえるために海中に網を撒くと、網の中にたまたま一つの石が入っていた。詳しく見るとこれは薬師尊身だった。

(時期不明)

『琉球国旧記 卷之一』25頁「古場津笠」(在那覇外辻)

往昔此神。自海中來云爾。然不知何年而來也。康熙三十七年戊寅。安置于那覇邑西。

昔この神は、海中より上がって来たという。しかし、何年に来たのかは分からない。

(康熙三十七年〈1698〉以前、時期不明)

『琉球国旧記 卷之四』79頁「一五 蕃薯」

(有数種。一皮赤実白。一皮実俱白。一皮赤実黄)

萬曆三十三年乙巳。尚寧王世代。総官野国(野国村人)自中華而帶回。麻氏儀間親雲上眞常。聞之而往求之。野国与之。但須以鋤起土。栽薯藤於其中。已閱数月。然後掘之而食焉。眞常遂如其言。已致蕃盛。時值凶荒之年。民人大餓眞常以此蕃。偏分于國中。為五穀之佐也。故麻氏子孫。至今祭謝野国(詳見眞常家譜)黄蕃薯。康熙三十三年甲戌。有一人。自閩而帶來。以各處也。獨異別種。凌風雪而不衰。尤得民利焉。

時、凶荒の年、民が飢饉に苦しんでいる時、眞常はこの蕃薯を国中に行き渡らせ、五穀の補いとした。

(時期不明)

『琉球国旧記 卷之五』100頁「一〇 眞玉橋」

(在豊見城東。南曰世持橋。中曰雲久。西曰世寄。每朔望。謹供花酒等物。求祈于此)

豊見城郡。保栄茂邑。有伊氏大峰親雲上忠雄者。(諱降徳。乳名忠雄。法名通泰玄亨)嘗有事于王都。屢經此地。每遭大風猛雨。船楫難乏。而人不敢涉焉。即浮水而過之。將其政事。奏之于王。

王深褒嘉焉。特賜官爵。并移居首里。其後命他。督造木橋。以通往還。

至于近世。兩岸之邊。有人爲田圃。而塞乎兩方二橋。江狹水淺。洪水橫流。泥土盡入那覇港。

康熙四十七年。歲次戊子。尚貞王。諭國相・法司。禁除其岸邊之田圃。補葺舊堤。架石爲橋。

近世になると、兩岸の辺りは人が田畑として、兩岸を塞ぎ江は狭く、水が浅い。洪水で流れた時は、泥土がことごとく那覇港に入り込んだ。

(時期不明)